

〈証言と資料〉

文学雑誌『人民文学』の時代

元発行責任者・柴崎公三郎氏へのインタビュー

道場親信 MICHIBA Chikanobu

鳥羽耕史 TOBA Koji

——はじめに

1——『人民文学』前史

2——『人民文学』の始まり

3——『人民文学』の編集・発行体制

4——『人民文学』から『文学の友』へ

【解題】今回のインタビューは、思想史・社会運動史研究を専門とする道場親信、文学史・文化史研究を専門とする鳥羽耕史の両名が、文学雑誌『人民文学』（1950年11月～1953年12月、後継誌は『文学の友』）の発行責任者であった柴崎公三郎氏に共同で行なったものである。『人民文学』誌は、以下に述べるように従来文学史においては政治過剰な時代の産物として周縁的に位置づけられ、社会運動史的には日本共産党の党内闘争の派生物として位置づけられてきた。道場・鳥羽はこの間1950年代のサークル文化運動の研究を共同で進めており、その一環として、『人民文学』誌を新たな文脈で読み直すための歴史的証言として柴崎氏にインタビューをお願いしたのである。

『人民文学』は、1950年のコミンフォルム批判以降の日本共産党の分裂と混迷の時代を、『新日本文学』との対立という形で文学において反映した雑誌として、また「政治と文学」の問題について政治を優先させた雑誌として記憶されてきた。本多秋五は『物語 戦後文

学史』（新潮社、1966年）において「民主主義文学内部の分派闘争」という長めの一章を設け、急逝後の宮本百合子に対する悪口雑言以来まともに主張を聞く気がなくなったとしながらも、『人民文学』の特徴として毛沢東に由来する「中国方式」の労働大衆至上主義を挙げている。しかしその「中国方式」の機械的適用には竹内好の指摘するような誤りがあったというのが本多の評価である。一方、高橋博史は『『新日本文学』と『人民文学』の抗争』（『國文學』第34巻4号、1989年3月）において、『人民文学』における「人民に仕える文学」という方針は、「文学運動における労働者階級のヘゲモニーの重視」「大衆にとって親しみやすく、わかりやすい文学」を含意したとしている。しかし彼らの「大衆」は



『人民文学』創刊号
(1950年11月)

日本共産党臨時中央指導部を支持する人間たちのことであり、結局この方針は「日共臨中に仕える文学」以上のものではなかったとまとめている。

今回のインタビューは、従来こうした政治的偏向や内部抗争の問題だけで切り捨てられがちであった『人民文学』について、具体的にどんな人たちがどのように運営していたのかを明らかにするものである。また、中野重治によって攻撃され、本多秋五が判定できないとした冬芽書房との関係や、後身の『文学の友』への流れなどについても、かなり具体的な事実が明らかとなった。資金繰りにおいて党からの直接的な援助が一切なかったという点は従来の憶測を裏切るものだし、4代の編集長の担当時期や性格の違いなどが明らかになったのも、今まで一貫したものとして語られてきたこの雑誌について、より精緻な読みを誘うものとなっている。

初代編集長の江馬修（1889～1975年）は小説家で、1916年のベストセラー『受難者』をはじめ、戦前からの長い作家歴を持つ。1949年に『アカハタ』に連載した『本郷村善九郎』を翌年3月に冬芽書房から出版するなど、『人民文学』参加への体勢は整っていたと言える。2代目の赤木健介（1907～1989年）は詩人・歌人で、伊豆公夫の別名で歴史家としても知られた人である。3代目の廣末保（1919～1993年）は国文学者・演劇評論家で、日本文学協会でも活躍した人物である。4代目の戸石泰一（1919～1978年）は小説家で、太宰治に師事し、八雲書店に入って『太宰治全集』の編集にも携わった人である。これら編集長の性格の違いが、それぞれの時期の『人民文学』の誌面にどのように反映しているかは、今後明らかにされていくべきであろう。

『人民文学』は1950年前半のサークル運動の隆盛を担った「中央誌」であった。中央誌というのは、各地で簇生した主としてガリ版刷りのサークル誌に対して、それらの送付先となり、各誌への批評を行ない、サークル同士の交流の媒介者ともなるような働きをした雑誌のことである。『人民文学』と対立していた時期の『新日本文学』もある程度この中央誌の役割を果たした他、詩に特化した中央誌としても『人民文学』系の『詩運動』、『新日本文学』系の『現代詩』などの雑誌が出ていた。さらに、大阪の『山河』、高知の『鉄と砂』など、各地で小さな中央誌とも呼ぶべき雑誌が発行され、それらによって全国のサークルはネットワークで結ばれるようになった。そうした交流・交通の根幹を担った雑誌としての『人民文学』の意義は、鳥羽耕史「サークル誌ネットワークの可能性——『人民文学』と『新日本文学』から見る戦後ガリ版文化」（『昭和文学研究』第52集、2006年3月）が述べた通り強調するに価する。こうした交流の中から、1950年代に活躍した東京南部の「下丸子文化集団」などのサークルとの提携関係も生まれ、サークルの時代ともいえるべきこの時代の「中央誌」的機能を担ったのである（下丸子文化集団については、道場親信「下丸子文化集団とその時代——1950年代東京南部サークル運動研究序説」『現代思想』第35巻17号、2007年12月参照）。

ただし、こうした中央誌としての性格だけではなく、文学雑誌としての性格が『人民文学』にあったということも、今回のインタビューから見えてくることである。『人民文学』に関わった主要な作家としては、安部公房、野間宏ら当時の日本共産党員であった文壇作家、小林勝、春川鉄男、足柄定之ら『人民文

学』でデビューした労働者作家、それに許南麒（1918～1988年）ら在日本朝鮮人作家らが挙げられる。安部公房（1924～1993年）は『壁』『砂の女』で知られる芥川賞作家、野間宏（1915～1991年）は『暗い絵』『真空地帯』で知られる第一次戦後派作家であるが、党の主流派にいた野間の勧誘で安部は『人民文学』に加わったと言われている。小林勝（1927～1971年）は火災ビン闘争で実刑判決を受けるまでの過程で『人民文学』に加わり、後に『断層地帯』をまとめる基礎を築いている。春川鉄男（1926年～）は米軍基地での労働経験を書いた「日本人労働者」「基地の流れ」で反響を呼び、前者は中国で翻訳出版もされた。足柄定之（1927～2004年）は国鉄労働者の立場から「鉄路の響き」でデビューし、その後も民主主義文学同盟などで活躍した人物である。許南麒は1949年の『朝鮮冬物語』で注目された詩人で、『人民文学』に自らの詩を寄せる他、林和ら朝鮮詩人の作品の翻訳紹介も行っていた。他にも作家名を挙げていけばきりがないが、有名無名を問わず、様々な作家や詩人の貢献によりこの雑誌は支えられていた。政治的対立の中で政治を優先した雑誌、あるいはサークルを基盤とする文学運動を媒介した雑誌ということだけで裁断するのではなく、文学雑誌としての『人民文学』再読もまた要請されているということを、このインタビューは教えてくれるのではないだろうか。

なお、本インタビューは、2009年 3月12日（第1回）、4月24日（第2回）、7月30日（第3回）、8月24日（第4回）の4回にわたって行なわれた柴崎公三郎氏へのインタビューを再編集したものである（インタビュー編集後、11月10日

に補足インタビューも行なっている）。インタビューの第1～3回には元下丸子文化集団の浅田石二氏が、第4回には元編集部員の下田宗香（増永香）・柴崎



さよ（白井恵子） 柴崎公三郎氏

の両氏が同席されたが、再編集によりそれぞれの同席者の発言は最小限まで削り込んでいることをあらかじめお断りしておく。

——はじめに

—— かつて柴崎さんが発行責任者をつとめられた文学雑誌『人民文学』についてお話をうかがいたと思います。柴崎さんもよくご存じのとおり、『人民文学』誌は文学史においては“悪名高い”雑誌として記憶されています。たとえば本多秋五の『物語戦後文学史』に見られるように、「『人民文学』の動きは、あきらかに政党内部における意見の対立を文学運動にもち込んだものであった」¹⁾ というような評価が一般的です。つまり、党の政治が文学に過剰に介入した雑誌という理解がある。ところが一方で、元下丸子文化集団の井之川巨が語っているような「[19]50年という状況の中で、労働者文化を創出しようとする闘い。サークルを組織し育成しようとする闘い。それは、新日本文学がやろうとしてできなかった運動である」²⁾ という評価に触れるとき、50年代前半という特殊な政治的文化的状況の中で固有の役割を担ったこの雑誌の意

味を、等身大の形で歴史的に位置づけていく作業が必要であるということを痛感いたしました。近年では成田龍一さんや今日のインタビュアーの一人でもある鳥羽耕史も含め、文学史・文化史の研究者からも、神話やレッテルを剥ぎとって『人民文学』誌そのものを読み込みながら同時代を再考するという仕事が始まってきています³⁾。そこで、この雑誌の発端から終焉まで責任をもって関わられた柴崎さんにお話をおうかがいしたいと考えた次第です。よろしくお願いします。

柴崎 この企画をお進めくださり、またご協力頂くみなさまに心から感謝いたします。今まで明らかにされていなかったことについて総合的にきちんと全体を総括するということは、私にとっては大変ありがたいことです。最初にいっておかなければならないことは、私の立場というのは雑誌の発行責任者ということであり、編集の細部については必ずしも詳しくお話はできないかもしれないということです。そのことをご了解いただいたうえでお話いたします。

1——『人民文学』前史

①生い立ち

—— まず生い立ちからうかがいたいと思いますが、柴崎さんは何年生まれでいらっしゃいますでしょうか。

柴崎 1926年です。

—— 敗戦のときは19歳ですね。そのころはどちらにいらっしゃったのでしょうか。

柴崎 或る技術員の養成機構を修了し、ゼロ戦と向き合っていました。戦争の終わる直前、年齢繰りあげの召集令状が来て、本籍が千葉県だったものですから、佐倉連隊に入りました。

た。そのころ九十九里に米軍が上陸する、これを絶対に防がねばという至上命令があり、召集された兵士は敵の戦車にみたてた大八車の下に飛び込む訓練などを所沢の小学校に宿泊して多摩湖の付近でしていました。戦車の下に爆雷を持って飛び込む練習というわけだけど、私は本部付きだったのであまりそういう練習はしなくて済みました。2カ月か3カ月しか軍隊は見えていないです。昭和天皇の勅旨があるとラジオの前に整列させられた時はほとんど何がおこったのかよくわからなかったけれども、部署へ戻ったら上官の動きがすっかり変わっている。「戦争が終わったらしいぞ」ということでした。それから1週間か10日ぐらいして復員しました。

②藤沢時代

—— 柴崎さんは、復員してから『人民文学』に行かれる間はどのようなお仕事をされていたのでしょうか。

柴崎 復員してしばらくしてから、私は日本精工のベアリング工場に勤めました。藤沢工場です。そこでレッドパージに遭遇したんですよ。日本精工は大田区の多摩川にも工場がありました。私が日本精工にいたのは1946年からだったと思う。1946年から1949年まで。『人民文学』に携わるまでなんですが、49年という年は、すでにパージを受けて、復権闘争をしていた時代なんです。日本精工は神奈川県の中部地区、藤沢から茅ヶ崎、平塚ぐらいまでの間の中心的な存在で、労働組合も活発に活動していました。1949年だと思うんですが、ドッジ・ラインとシャープ勧告というものが出まして、この流れで日本精工に対してある干渉があったと思われます。おそらく左翼分子を追放しろという中身の勧告が出た

と思うんですよ。そして、従業員3000人ぐらいいた中で120~130人ぐらいの首切りが行なわれて、私も切られたということです。

私はそのときに組合の執行委員と青年対策副部長という役割を持っていて、当然、レッドパージの対象になったというわけです。早速、それに対する復帰闘争を組織して、中労委（中央労働委員会）に提訴したんです。結論から言うと、1949年の後半ぐらいに中労委から調停が出されて、半数を復帰させるというものだったんです。これをとりあえず承認しようということになって、妻帯者、家族のある人たちを優先させようということになり、私はこれを機に場を東京に向けました。

レッドパージを受けてからは、とにかく周辺で復帰闘争をやらなければならないという青年層の中心的位置にいたものですから、そこで地域の文化活動を組織して、まず、紙芝居をつくったりしたんです。周辺の農村地区へ出張っていったり、あるいは演劇活動をやりましたね。この演劇活動では、一つは東芝の組合の人のつくったシナリオが採用されたと思います。あのころの資料が残っていればいいんだけど。もう一つは、たしか小林多喜二の「山本巡査」を演題として取り上げて上演したと思う。この集会上、藤沢には文化人が多くいますから、各界の人を招待し、観劇してもらいました。

そのときに面白いエピソードがあるんだけど、「山本巡査」をやっているときに、後ろの方からそれこそ警官の格好をした演者が出て、「中止！」というような情景があったんですよ。本当に警官がそこに現われたという感触を受けて、戦前の経験のある福本和夫という哲学者がいるんですが、草履を懐に入れて逃げ出しかけたとか、そんなエピソード

を耳にしました。

そういう演劇をやったり、もう一つは、その当時はやっていた、地域の「うたう会」というのがありましてね、若者でも主婦でも、みんな集まってもらって合唱するという集団をつくったり、あるいは、あのとき共産主義青年同盟に中央合唱団というものがあって、関鑑子が代表になっていました。その支部を藤沢にもつくり、若者を集めて合唱団を組織して、横須賀の基地ぐらゐまで遠征して歌った覚えがあります。そんな文化工作隊をやったりしていました。

それから、藤沢、鶴沼にはいろいろな文化人、大学の教授たちがいるので、そこで『資本論』の勉強会をやったりしたこともありましたが、大体は普通の座談形式で、先生が課題を出し、あるいはそれを提示していった。



写真1 1949年4月の生活擁護大会



写真2 藤沢の「うたう会」の人々、前列左が葉山峻

例えば『資本論』でいえば、資本の本源的蓄積という項目が第4章にあるんだけど、順序として、『資本論』の最初は商品だった。それから入ると難しいから、本源的蓄積からいくと、いかに資本が収奪されたかということがわかるから、それからいろいろやろうよと。順序の関係を先生が設定してくれたりして。

この写真は1949年4月の生活擁護大会（写真1）と「うたう会」の人たちで（写真2）、のちに藤沢市長になった葉山峻もいます（写真2の左下）。

—— 紙芝居は、どんなテーマでやられたんですか。

柴崎 戦争のこと平和のことなども少しはあったと思うが、そんなにかたいものばかりではなかった。

—— 民話みたいなものですか。

柴崎 そうだと思うんだけどね。そんなに絵の上手な本職がいたわけでもないから、何かを切り張りしたりしてやったんじゃないかと思う。今、思い出せないんだけど。

—— このころ共産党で何度か文化工作者会議というものをやっていると思うんですけども、そういうところに代表として出たりしたことはありますか。

柴崎 代表だったかどうかはわからないけれども、1～2度代々木のひさしをくぐったことはありました。でも、そんなに何度もあそこに行ったことはないです。神奈川からもたくさん参加しましたが、それは文化関係というより、労働組合の政治的な関係の人が多かったです。藤沢時代というのはそういうようなことで、ちょうど復帰がかなって、半数の50数名が日本精工に戻るということを見届けて、これからどうしようかと思ったときに『人民文学』の話が持ち上がったというタイ

ミングですね。ちょうど50年の夏ぐらいに冬芽書房⁴⁾の江崎誠致⁵⁾と面談して、すぐに来いということで、夏の暑い盛りに原稿を読みながら発刊の準備をした。そして、11月に発刊したというような経過だったと思います。

2——『人民文学』の始まり

①人民文学責任者となる経緯

—— 「すぐに来い」というのは柴崎さんに名指しで直接来たわけですか。

柴崎 いや、私も推薦された1人だと思うんです。紙芝居とか文化工作をやったというような実績が評価されたのかもしれませんが。変わった男がいるからこいつ呼んでみたらどうだということだったのではないかな。党の文化部には行かなかったんですが、だれかの紹介で筋道を立ててもらって、初めて連絡した。文化部の部員の人に会って、会話をしたということは覚えています。自分以外にも何人か候補はいたかもしれない。冬芽書房という出版社へ行くようにいわれました。そして、行ってみて初めて中身の説明を受けた。

そこに就職ではなくて、そこで指示を受けなさいということで行かされました。私は出版社での経験は何も持っていないからなんです。むしろ生産点での現場を経験したもののほうがいいというふうなことがあったのかもしれない。いくつかの意見を述べたうえで採用となった。冬芽書房に私は、何といふのかな、社員でもない、ただその一員として、机を与えられました。そして創刊の約6カ月前から私に与えられた仕事のひとつは、冬芽書房に大量にあった原稿を読み選定したことです。中2階の狭い倉庫の中にどっさりあるんです。この中から作品を選べということ

です。つまりこれは今後の『人民文学』に活用できる原稿を選んで、創刊に備えろということです。

『人民文学』での私の役割としては、事務局長という形になるんです。人民文学社というものを名のりしましたが、これはまだ法的に登記していませんからいわゆる任意の組織です。人民文学社とありますからには、いろいろ取次店やその他に出向くときは、私は人民文学社の社長としての立場で。今後、編集部あるいは営業関係も組織しなければならず、体制づくりの仕事はそれから始めていきました。—— 冬芽書房に行くように、という指示は党の文化部から出たんでしょうか。

柴崎 厳密なものではなく一般的にある紹介程度のものだったと思います。それでおそらく冬芽書房の江崎（誠致）という社長が、制作進行を任されていたと思う。私はその江崎社長に今までの履歴をのべ、話をうかがいましたね。そして恐らく江崎氏のほうから代々木に対して、この人間ならばという事後報告がなされたと思う。

—— 雑誌の創刊のときに、ぬやまひろしはかわっていないのでしょうか。

柴崎 直接はかわっていない。ただ、『人民文学』の作成に党の文化部として動いていたと思う。かなり強く『人民文学』の必要性を強調していたと思います。そして、それを冬芽書房の社長である江崎誠致に強く進言するというか、やってくれないかというような形のアプローチがあったと思う。当時の冬芽書房は財政的に困難になってきて、社長である江崎誠致の新しい仕事が別に生まれてきていた。つまり、これはあまり公にはなっていませんが、党の裏財政を支える一つの新事業をつくるというものです。あの当時、暗黙に

言われていた、そういう仕事に対する任務も彼は負わされた。いわゆる裏で資金作りをする「特殊財政部隊」（江崎）というものですが、彼もそれを決して隠することなく自分の小説にものべ、そういう仕事を自分がやっていたという時期の反省を込めた作品を、例えば『十字路』（文藝春秋新社、1964年）という題で書いています。冬芽書房はもともと小山書店⁶⁾から独立して設立されたという歴史があるんですが、その後冬芽書房の一部の人によって「ハト書房」⁷⁾が生れています。

江崎誠致は『人民文学』の意義を十分理解しながら、文学者の江馬修、藤森成吉、彼らと相談をして、ここからは想像なんだけど、「冬芽書房ではこれを受け持つわけにはいかない。あなた方で自主的にやれるような体制づくりには協力するから、自分たちでやってください」と言われ、そこへ私が呼ばれたということだと思います。『人民文学』を担当してくれと。そのときの指示はそれだけで、例えば『人民文学』というものをこのようにして、財政的にはこのようにというような指示は全くなくて、暗中模索で雑誌発行というところにこぎつけたということです。

冬芽書房からは何ら金銭的な援助はない。ただ、冬芽書房の編集を担当した人に雑誌の編集・とりまとめ上の注意、あそこ人は非常にうるさいから注意しなさいよとか、そういう細かい指示をしてもらったということがあります。冬芽書房の編集担当の人たちにいろいろと教えてもらい、協力してもらって、何とか創刊にこぎつけたということです。

一方、こういうこともあった。豊田正子に『人民文学』への参加を説得して、編集委員会に出席するように取り計らってほしいという指示を江馬修から受けました。当時はあの

『綴方教室』に出てくる実家を探して、そこで両親と一緒にいたところへ私が行き、状況を話して了解を得て、編集委員会に参加する、ということになった。

②冬芽書房から人民文学社へ

—— 冬芽書房に関連して、中野重治が『新日本文学』（1951年1月号）に「『人民文学』と江馬の言葉」という論文を書いています。要旨は、『アカハタ』の50年2月に冬芽書房の広告が出まして、そこに文学機関誌の『抵抗』というものを出すということで、その刊行宣言が全文引用されています。

ところが、新日本文学会の会員が『抵抗』の編集に参加するように約束して、その後、会員の作品が冬芽書房から次々出版されたんだけど、『抵抗』という雑誌は未刊のままで、かえって印税未払いのままの会員の刊行本がゾッキに流れてしまったということで非難している。『人民文学』とか冬芽書房というのはひどいじゃないかということを言っている文章があるんですけども、これは何か裏づけのある話なんでしょうか。それから、『冬芽新集』の巻末にもやはり「発刊に際して」という言葉が載っているんですが、それが『抵抗』の宣言に似ているので、雑誌を出そうと思っていたのが、新書シリーズに衣がえをしたということなのかなというふうに見えて思ったんですが、事実関係としてはどうだったのでしょうか。

柴崎 この『抵抗』という雑誌については、私はほとんど知らないんです。ただ、冬芽書房から出ていた『BBBB』（よんびー）という雑誌⁸¹は1年か1年半ぐらい続いて、これも廃刊になったんだけど、雑誌の発刊というものが非常に大変であると。ほかの出

版物、単行本やなんか比べてね。こういうことで、『BBBB』という雑誌での経験がかなり『抵抗』の発刊にブレーキをかけたのではないかというふうには思うんですね。そしてとうとう出なかったんですが、そのときの内容としては、文学だけでなく、ほかの論評も含めた原稿を考えていたと思うんですよ。

もう一つ、中野重治の論文についていうと、冬芽書房が閉鎖されたとき、「日本図書普及会」というものをつくったんです。各書店に売り込みをかけて、残本の整理を図るための機関といいますか会社といいますか、ゾッキに出せば簡単なんだけど、冬芽書房の財政上の問題とかプライドみたいなものがあって、まだ取次店に売れるだろうということでそういうものを作ったのです。だからゾッキ本に出したというようなくり方をして批判されたことに対して、そんなんじゃないと。図書普及会という正当なハコを持った会社というか組織で、定価で売るという努力をしていることは事実だという反論はしたと思うんですね。—— 『冬芽新集』を出すに当たって、『抵抗』の精神の継ぎたいなことはあまり意識はされなかったですか。

柴崎 関連性はそれほどないと思います。

—— 面白いのは、『冬芽新集』が50年11月に出るんですけど、その同じ月に創刊された『人民文学』の創刊号に、1番の山本又男の『霜で白い道』というものが載っているわけなんですね。『人民文学』創刊号と『冬芽新集』の1番が全く同じ小説になっています。あと、近刊として予告されている『アメリカシロヒトリ』というものもやはり『人民文学』に載る小説なんですけれども、この辺の相乗り関係みたいなものはどういう過程で生じた

のかということが興味深いところなんです。同じ原稿を融通し合うというか、そういうことがあったんですかね。

柴崎 そうか。私はこれを選んで、これどうですかって言ったんだろうな。しかし、これはあまり喜ばしいことではないね (笑)。

③『人民文学』の創刊

—— そうして創刊にこぎつけたわけですが、もちろんただの文学雑誌ではなかったわけですよ。

柴崎 最初に一言申し上げますけども、『人民文学』の政治的背景に関して、世間でよく言われているのは日本共産党の党内対立というものがあります。当時、1950年前後、党の中に国際派と主流派という派があった。

その中で『新日本文学』に対抗する新しい文学雑誌をぜひつくろうということが、これは文化部の方針で出たと私はうかがっていますけども、問題はそれだけではないですよ。政治的な背景はどうであれ、同時に新日本文学会に対して一つの飽き足らない文学者たちが、いろいろ話し合いを持ちましてね、その先鞭が江馬修、藤森成吉。彼らを中心に、松山映、除村吉太郎、岩上順一、新島茂、島田政雄、岩倉政治、栗栖継、後に野間宏、豊田正子というメンバーが揃いました。そういう方たちによって語り合いがあり、『人民文学』の中核をなしてゆきました。

この『人民文学』の大きな趣旨としては、やっぱり労働者の文学を目指そうということで、労働者の文学というと未熟さもありますが、プチブル文学を打破して労働者の文学をつくり上げようという考え方が当時としては一つの骨格をなしていたと思います。

—— 『人民文学』という題は、どなたが考

えたんですか。

柴崎 これはね、江馬さんじゃないかな。

3——『人民文学』の編集・発行体制

①発行体制

—— いま、日本共産党の党内対立が背景にあるとおっしゃいました。雑誌そのものは党とはどのような関係にあったのでしょうか。これまでの文学史的な受けとめ方では、先ほど柴崎さんご自身がおっしゃったように、党主流派が、国際派の影響力の強い『新日本文学』に対抗して作ったものだと考えられているところがあります。

柴崎 とはいっても党からの口出しということはありませんでした。藤森成吉、江馬修、そういう人たちの力を信賴して、という関係だったと思う。文化部から派遣されたオルグのような人が時々、顔を出して、状況を把握しながら、それを本部に報告した。そういう形はあったと思います。

いろいろ創刊に関わった文学者が『人民文学』に直接指図する権限というものはなかった。だから新日本文学会の雑誌、機関誌とは全く違った性格の雑誌であったわけです。財政的に独立していたということが一つの大きな理由であって、最終的には株式会社にして株を集めようという方向に行った、こういうことだと思います。

—— もうひとつおうかがいしたいのは、雑誌の内容面のことです。創刊当初、宮本百合子や中野重治に対する「主要打撃」的批判論文⁹⁾、しかもかなり罵倒に近いようなものが執拗に載りますね。これはどういうことだったんでしょうか。

柴崎 たしかに『人民文学』の創刊のころと

というのは、宮本百合子批判というのが中心であるかのような誤解を受ける雑誌の印象を持たれましたが、決して発行の側では宮本百合子をそれほど批判するための雑誌とは意識していません。むしろプチブル文学の象徴というか、プチブル文学に対してそれを脱却して、やっぱり労働者の文学という、新しい文学の方向に行かなきゃならないという編集方針と、使命感を強く持っていたと思う。

ところが、初期の頃を見ると、例えば藤森成吉が宮本百合子を批判するとか、不充分的形でしか新しい波を受け止められなかった。ああいうものを載せざるを得なかったというのかな。こんな内容のものを出して何が人民文学だ、というふうに自己嫌悪を持ったことを覚えている。で、ある時江馬さんに話したら、いや、俺もそう思ってるんだけど、やっぱり藤森成吉は大切な仲間なんだ、ちょっと我慢しろよ、というような会話を交わしたことがある。で、ああいうものが出てしまって、周囲では、特に新日本文学会の中野重治などにつけいるすきを与えてしまった。赤木健介の時代になって、だんだん流れが大衆性を持ってきた。特に文学サークルとかそういうものに比重を置くような方向に向かっていった。だから最初の頃は、反新日本文学、共産党の主流派の機関誌だと言われるような内容を含んでいたということに対してね、実際はそうじゃなかったんだけど、やむを得ない面もあった。

間もなくその方向は変わっていった。たとえば51年の末からは赤木健介の時代になるわけで、松川事件の詩運動とかそういうものの登場が始まっていきます。

—— 編集はどんなふうにして進めていったんでしょうか。

柴崎 『人民文学』を編集するために編集委員会というのをつくりました。先ほど説明したような文学者の話し合いを進め、その中の議長格という人がそれを総括して責任を持ち、その編集委員会の中から編集長というものを選んだ。その編集長が編集実務に対する責任を持つという構成を考え出したわけです。初代の編集長は江馬修。2代目が赤木健介、歴史家の伊豆公夫ですね。3代目が廣末保。そして4代目が戸石泰一。そこで安部公房の現在の会の会員との協力の形を強めた。戸石泰一で『人民文学』が『文学の友』に変わるんですけど、これは後で述べるとして、4人の編集長が生まれています。創刊から間もなく江馬修は去って外側に出て、野間宏が編集委員会の議長になります。これは長く続きました。

—— さっきおっしゃられた、最初に『人民文学』の相談会をやられた江馬さんや藤森さんたちの世代と、それから戦後派というか戦後世代に属する野間さんや安部さんたちの間に、論争とか文学をめぐる議論というのは内部であったんでしょうか。

柴崎 特にありませんでしたね。一種の結合ができたみたいな感じですから。文学論争というよりも、むしろ野間さんとしてはその先輩格の人たちに対する敬意といいますか。年齢的にかなり離れていますからね、ある種の畏敬の念を表して話を聞くという立場に立ったと思うんです。

②各時期の編集長

—— 『人民文学』の4人の編集長の担当時期について聞かせて下さい。まず、最初が江馬修だったということですが、初代の江馬さんと2代目の赤木健介さんとは、どのあたり

で代わるかというのは、目次をごらんになってわかりますか。

柴崎 2巻9号の1951年9・10月合併号、このときに赤木健介が新しく編集長となりました。このときの編集後記は、恐らく発行がずれて9月号が10月に入って出るとか、そういうような問題を解消するために、思い切って2号いっぺんにして、正常な発行日を取り戻すために合併したんだと。これも事実なんですけれども、そのように編集後記で断ったと思います。それからしばらく赤木健介の時代が続きます。その次に廣末保。3巻10号(1952年10月号)からです。

—— ああ、そういわれてみるといかにも日文的な感じがします。

柴崎 ええ。安部公房、猪野謙二、西郷信綱の座談会が載っています(安部公房(司会)・梅崎春生・新島繁・猪野謙二・西郷信綱「座談会 日本文学の中心課題は何か」)。この時期が廣末保に代わった時期です。赤木健介から健康上問題が出てきたので辞任したいという申し入れがありました。ところが、それが急だったものですから、次の編集長を選ばないと、ということで新しい人を探したわけです。編集長が存在しない状態では困る。赤木さんにしばらくは名前だけ残してもらいました。その間に廣末保が候補に挙がったんですが、廣末さんは日本文学協会に所属して、大学の講師とか教授連中と研究会を開いていた。で、この会はサークル運動とか、そういうものに対して顔は出てこない人たちなんです。編集長の所属、雑誌の性格その他について、今までの流れを変えるようなことになるのではないか、ということが問題になります。廣末保はむしろ学術的な研究者だと。こういう立場の人ですから、実際に私が集会に出かけて

いって廣末先生をぜひ編集長にお迎えしたい、先生のお力を借りたいという説得をしたときも、参加した人たちから「おまえ、本気で言っているのか」というような顔で見られました。実際に発言はありませんでしたけれども、そういう雰囲気でした。

私が集会へ説得に出かけるときには、「大丈夫か」と言われたけど、自信はあった気がします。行ってみないと雰囲気は全くわからない。結果は、今日の会議で相談をしてみるからということになって、あなたは退いてお帰りくださいというようなことになりました。私は顔を赤らめ懸命に頼み込んだと思うんですよ。何かを訴えたと思うんです。

私の考え方の中には、今までサークル活動を主にやってきた。もちろんサークル活動というのは基本でもあるけれども、編集長が少し違った畑の人で、こういう人が頭に座ってくれば、新しい展開、新しい世界が期待できるのではないかという気持ちが実際は強くありました。だから、ぜひとも『人民文学』を救うために来て頂きたいという願いをしました。結果的には、だれが仲介者だったかは忘れてしまいましたけれども、その人を通じてオーケーが出て、「了解した。いつから行けばいいのか」というような具体的な言葉までありました。

—— そのときに柴崎さんの側、あるいは廣末さんの側は、当時の国民文学の主張との接続みたいなことを意識されていたんですか。

柴崎 いや、特にありません。私も廣末保とは1～2度、あいさつを交わした程度で、考え方についてはほとんど会話を交わしたことがなかったものですから、ただ外側から廣末保を知っているというだけで、実際は冒険に近い形だったと思います。廣末保は法政大学

の文学部教授です。あの先生を口説ければ立派なものだと言わんばかりの認知がありましたね。

浅田 あなたからだと思うけど出てこいと言われて、廣末さんとの会合に出たことがありますよ、下丸子から。人民文学社とは別な場所で、廣末さんが今度編集長になったというので、廣末さんと意見交換をする場所を設けた。あれは編集会議だったのか。

柴崎 彼の所属の日本文学協会ね、あそこで会議。廣末さんとしても、『人民文学』の人たちやその周辺の人と実際に言葉を交わして、肌で感じなければ、ということだったと思う。だから、一度サークルの人たちを含めて招集してくれないかという意向があったんです。

浅田 あのとき僕らが受けた感じは、廣末保とは何者ぞというね。我々サークルの方から見たら、最初はすごく違和感がありましたね。いい・悪いじゃなくて、これまでのやり方からなぜこう変わったのかというような。

柴崎 その辺を編集部としても気にしてはいった。だから、サークルの人たちにとっては、何だ、教授のいわば学者みたいな人を編集長に据えて、方向転換でもするのかというような雰囲気を感じたと思うんですよね。そうではないということを盛んにいろいろと説いて回った。廣末さんが積極的、指導的に一生懸命『人民文学』を考えてくれたということについては間違いないです。廣末さんの家へおしかけて、仕事が終わってから飲んで騒いだ飲み会をやって人間的に密着していった経験が何度かあります。彼もよろこんで受け入れてくれて誇らしい関係だったと思います。

——そして、学者の廣末さんから、夜学の先生で文学青年っぽい戸石さんにかわるというのは、どういう理由ですか。

柴崎 目次を見てみると意外に廣末さんは短いんだけど、1年半ぐらいかな。多分身上の都合と健康問題が理由だったと思う。ここで戸石泰一登場となるのです。この交代には現在の会¹⁰⁾が大きく関わっている。だから、安部公房もこの時代には『人民文学』に対して、非常に密接な協力をおしななかった。現在の会というのはかなり活発な人たちが多かった。安部公房も戸石の推薦人の一人として、現在の会と密接なかかわり合いがまた改めて出てきたわけですね。『文学の友』になる前に、戸石泰一が新しく編集長になったのは、私の記憶では、4巻4号(1953年4月号)。小説とかフィクションで、小説特集。この時代だったと思うんです。そして、間もなく1年足らずのうちに『人民文学』が『文学の友』¹¹⁾に変わるんです。

——そうすると、全面的に現在の会が関わる雑誌になるわけですね。ルポルタージュもふえてきていますね。

柴崎 そうですね。これは恐らく彼らの協力があつたからだと思うんです。『文学の友』については後ほどお話ししましょう。

——赤木さんが編集長の時代にサークルとの関わりがかなり積極的に追求されたと思うのですが、江馬さんから赤木さんへの交代はどういう経緯があつたのでしょうか。

柴崎 赤木さんが江馬修の後に登場したというのは、必然的な理由があつたわけではないんです。ただ赤木さんが『人民文学』に対していろいろと作品的な交流を持っていたということです。江馬修の辞任は急に生じたことでした。松川事件の被告たちの詩集が月曜書房から、主として赤木さんの編集によって出版されました(松川文集編纂委員会編『真実は壁を透して——松川事件文集』1951年)。それ

を『人民文学』に転載するとか、あるいは『人民文学』で状況を把握するために、赤木さんと交流を持ったということは一つあると思うんです。そういうことで、赤木さんが一番身近な人であったというようなことだったと思うんです。

—— 赤木さんは健康上の理由でやめられたということですが、たしかこの時期は「人民文学詩委員会」の名前で『詩運動』誌¹²⁾を発行していますよね。

柴崎 『詩運動』の問題はほとんど『人民文学』には持ち込んではいないと思うんですね。作品の一部をどうするかということはあったにしても。健康上の理由というのは一つの理由であって、ほかにあったかもしれないし、経済的な理由も含めてね。ただ、特に事件があったとか、そういう問題ではないと思う。

—— サカイ・トクゾー (坂井徳三) さんは赤木さんが引っ張ってきたんでしょうか。

柴崎 いえ、サカイさんは最初から協力してくれて、むしろ編集委員になるぐらいの立場

の人です、最初から。『人民文学』の発行には非常に賛同してくれました。サカイ・トクゾーさんは家から動けない。ほとんど寝たきりなんです。だから、私も何度か家を訪ねて状況報告をしたりしました。あの人は詩人としては一級の人です。それで、詩に対する考え方をじっくり聞きました。自宅からいろいろな動きを見ていると、かなりの確かな考え方とか詩とは何かというものが受け取れたと思うんですよね。だから、サカイさんは非常に貴重な人ですよ。『真実は壁を透して』についても、最初からいろいろと意見を述べたり、方向性を出してくれた先生だと思うんですよ。

ところで、こういう写真があるんですが (写真3)、これは人民文学でメーデーに参加したときのものです。

—— これは1953年でしょうか。旗をもって参加されていますね。これはどういう方たちなんでしょうか。

柴崎 ほとんど人民文学の関係者なんだけど、もちろんサークルの人たちもいます。すっか



写真3 メーデーに参加した『人民文学』関係者 (1953年?)。中央左が赤木健介、右が廣末保。後列右から3人目が呉隆。

り名前を忘れてしまったんだけど。だいたい『人民文学』を中心にしてその周辺でサークル雑誌を出している人たちとかね。で、廣末氏と赤木氏が2人で並んでいる。2人は編集長を交代したあとなんだけど。それが一緒に並んでね、いるということは、これは珍しい情景ですよ。

—— 2人は仲悪かったということはないですよね。

柴崎 そんなことは全くありません。幸いにね、『人民文学』の場合は何ていうか歴代、汚点を残して編集長を交代したということは一度もなかったですから。初代の江馬さんにしても、ときどき「おい、どうしてる？」って言って、気楽に編集部へ寄ってくれて。「どうだ、みんな元気か」っていうようなことで顔を出したりしてましたからね。それぞれが背中合わせになったとかいうことはないです。

③文学者たち

—— 編集長となった文学者の方々についてはわかりました。『人民文学』の書き手で印象に残っている方についてのエピソードなどをうかがえますでしょうか。

柴崎 先ほどのメーデーの写真は珍しいことに呉隆（くれ・たかし、ご・りゅう）が写っています。彼に関して一つ話があるんです。彼は戦後京浜地区で文学運動をやっていた。生まれは朝鮮で、その後北朝鮮へ帰国する。帰るときは盛大な壮行会を京浜地区でやったんだけど、私はそのときにスピーチでこんなことをいったんです。「北朝鮮はたしかに現在は発展しているようだし、日本も大いに見習うところがあるかもしれないが、どうも一面的な伝わり方が多いようだ。あなたは文

学者だ。すぐにでも現地の人間というものの、その角度からレポートでも何でもいい、送ってくれと。それをわれわれは知りたいんだと。その民衆とか人民の心情の変化というものが確認できれば総合的に制度の立派さというものが確認できるんだが、経済だけだとどうも片手落ちになる。あなたにはその責任があるだろう。出版社はどこにでも入れ込むから、心配しなくてもいいから」ということを私はスピーチをしたわけ。みんな大拍手でぜひやってくれと、いうことだったんだけどその後通信は全く絶えてしまった。

—— 呉隆さんは東芝の労働運動もやっていて、『かいがん』という、その後の東京南部のサークル運動にとって重要な意味を持つサークルについて『人民文学』に報告を載せていますね（51年9・10合併号）。そのほかに、『人民文学』ならではの書き手という方はいらっしゃるでしょうか。

柴崎 春川鉄男の「日本人労働者」（51年6月、8月、11月号）か、あれなんかは世間の話題になったからね。あれは未完になっちゃって。まだ続きがあるんだけど、その後書けなくて。—— 春川さんはどういうふうにして登場してきたのでしょうか。

柴崎 足柄定之もそうだけど、出身地所属がはっきりわからない。誰かが推薦してきたのではないかと思うんだけど、そこは私も知りたいことのひとつですね。あのくらいの作品が書ける人がもっと出てくればよかったんだが。—— その後中国で『日本人労働者』の翻訳が出版されているんですが、その版權交渉というのはどんなふうにしたのでしょうか。

柴崎 いや、そういうものが出ていたことは私は知りません。これは初耳だ。

—— 野間宏は『人民文学』では重要な役割

を果たしていますよね。編集委員会の議長というのはどういう立場なんでしょうか。

柴崎 これは初期のころの構成なんだけども、人民文学編集委員会というのができて、数カ月遅れて野間さんが入ってきたという形で、最初は江馬さんが中心にということでした。で、編集委員会の下に編集部があって、その中心的な立場が議長、後に野間さんが議長になった。で、編集委員会が指図したりとかいうことは少なくてね、むしろ編集委員会で話し合われたことを編集部が聞き取って、その流れ、状況というものを雑誌に反映するという構成から始まったんだけど、これが赤木さんの時代になってから活動しなくなって、自然消滅みたいになっちゃったんだけどね。その後も野間さんがいちばん編集部に足を運んで、当時の編集長、赤木健介、廣末保、戸石泰一と、いろいろ会話を重ねて状況の考慮をしたということだったと思うんだけど。野間さんに初めて会ったときに、『人民文学』の状況を説明して、あなたの力がほしいと、編集委員会がこの日に開かれるから出席してくださいかという依頼に行ったのを今でも覚えています。彼も快諾してよしわかりました、行きましょうと、そういうことが1951年の初期の頃に、まだ『人民文学』が2、3号目ぐらいのときにありました。

—— 杉浦明平はどうでしょう。

柴崎 明平さんもとときどき足を運んでくれましたね。編集部に意見を述べるというより野間さんといろいろ接していたと思いますね。世代的に明平さんと藤森、江馬世代とはそんなに多くの交流はなかったです。

—— 『人民文学』には在日朝鮮人作家がたくさん登場していますね。積極的に載せているという方針でやっていたのでしょうか。

柴崎 そうですね。来るもの拒まずです。許南麒(ほ・なむぎ)さん。彼は詩を書いてくれたんだ。長編詩。ほかには金達寿(きむ・だるす)さん、呉林俊(お・りむじゅん、ご・りんしゅん)、朴元俊(ぱく・うおんじゅん、ぼく・げんしゅん)という人たちも書いてくれましたね¹³⁾。あの時代、新しく生れた人間性、差別のない仲間に対して本能的に彼らの感覚を動かした部分もあったと思う。

—— 朝鮮との関連でいえば、小林勝も書き手として重要ですね。

柴崎 小林勝は編集部員でもあった。彼は、私が編集部に招いた。小林勝は1951年頃は江古田診療所っていう民主的な診療所に籍を置いてた。で、忘れもしないけどその診療所にかかけあって、彼の才能を生かしたいから、『人民文学』の編集部にぜひほしいと。能地さんという人がいてね、女の人で。なかなか話のわかる立派な人。即座に、いいですよ、どうぞ、と。数日も経たず『人民文学』の編集部に小林勝はやって来た。『人民文学』の編集部に勤めていて生活が成り立ったかといえ、奥さんが働いて食わしてくれるとか、そういう条件がないと食っていけなかった。

下田 小林さんの家が新宿の、今で言えば何だろうなあ、新宿の駅の近いところの、まだあの頃しもた屋がいっぱいあったから、そのお二階で、奥さんが洋裁の内職してたのよ。

—— 『人民文学』では中国の作品を翻訳したりもしていますけど、そういう外国のものを紹介するときの橋渡し役とはどなたが……。

柴崎 島田政雄と、その周辺の中国研究会の若手メンバーたちです。島田政雄は編集委員の一人で、彼が中国との橋渡しでは中心的な役割をした。彼は国民文学運動というものの提唱者でもあるわけ。

—— ショーロホフとかエレンブルクとか、ロシアのものを翻訳した泉三太郎というのは？
浅田 泉三太郎というのは山下三郎というのが本名で、東大の先生だった山下肇というのがいましたけど、その弟ですよ、3番目の。ダヴィッド社か何かのロシア文学の翻訳を泉三太郎という名前でやっていました。

柴崎 ソ連といえば初期の編集委員でもあった除村吉太郎がいますね。中国の文学界との交流では、こんな手紙が来てます。

—— 「中華全国文学芸術界連合会」ですか(写真4)。明治以来の文学作品、とくに無産階級の文学作品、代表的な版画、文学美術史、「8・15」以後の文学美術作品などを紹介してくれ、進歩的な文化団体の機関誌や資料を送ってくれとありますね。1953年6月ですか。

柴崎 そうです。出版関係の協力をしあおうという意向もあったと思います。

—— いま版画を紹介してくれというのがありましたが、向こうから版画を送ってもらうということはありませんか。

柴崎 ああ。それはね、1、2、個人的にあったと思うけど、それほど総合してやれなかった。そういえば、中国の北京にも『人民文学』という雑誌があって、名前だけ見れば元祖のようだけど、古くからある雑誌だと思う。



写真4 中華全国文学芸術界連合会からの手紙

その出版部門に日本人も在籍していて、交流もあったと思うけど、今資料が残っていない。

④サークルとの関わり

—— 『人民文学』は創刊当初は先ほども話題になりましたように宮本百合子がいかに人間的に腐敗しているかというような論文が延々と載っていたりするのですが、読者欄とかサークルの雑誌や詩がページを増やしてくると、非常に誌面が投稿雑誌のようで面白くなってきます。3号目で読者諸君の熱愛に応じてということで読者欄が2ページから4ページに倍増するんですね。サークル雑誌を紹介してほしいという要望が5号であって、そこから読者が大きく誌面に進出してくる。本多秋五の『物語戦後文学史』なんかを読んでも、そういう運動のメディアとしての『人民文学』は出てこなくて、もっぱら新日文とのやりとりとかが紹介されますから、通説的な文学史理解においてはそういう部分としてだけ記録されてると思うんですが、実物を読んでもと全然違う側面が見えてきます。例えば、この読者欄を読者の手で自主管理しようみたいな。「自主管理」という言葉は当時ないですけど、「私たちの手で編集しましょう」みたいな提案がなされたり、「ページをふやせ」とか。「詩人の欄をふやせ」とかそういう要求がどんどん噴出して、それをどんどん誌面に載せて、投稿する読者が活気づいている印象を受けましたが、こういうエネルギーというのは、どういうものだったんでしょうか。

柴崎 確かにこの『人民文学』にとっては、その熱意的なものが一番の支えなんですよ。ところが、そういう人たちが雑誌そのものを拡大してくれるということになかなか結びつかなくて。そういう熱意が沸き割には、雑誌

がなかなか売れなかったんですよ。読者の資金力、購買力の問題ですね。

—— それは厳しい問題です。ですが他方、松川事件を詩の運動を通じて支援したり、各地のサークルを結んでいく役割も『人民文学』は果たしていきました。当時、『人民文学』がその発表の場所になって、松川詩という分野の中でも東京でそういう詩人集団が取り組んでいく中で重要な発表場所になったんじゃないかと思うんです。

柴崎 あれは新しい運動にしようということで、最初は『人民文学』誌として初めに企画して、火つけ役だったわけだけど、それがずっといろんな人たちによって受けとめられたんだと思う。きっかけは最初、詩の経験のある人が、詩にして被告の現況を訴えた。ところがそれが思わぬ反響を生み、読む者の心を動かしした。それで、これはというので、それから被告たちに我々も強い関心を持っている、どんどん送れというふうに仙台へぶつけたわけね。私は後に『新地平』に「松川運動と詩人たち」という文章を書いたことがあります。被告たちの詩に対する情熱が大きな力になっていく様子を書こうとしたんです。

—— そのころ各地に続々とできたサークルとか文学集団が、また雑誌をいっぱい人民文学社に送ってきたと思うんですが、ああいう運動の盛り上がりは当時どう受けとめておられましたか。

柴崎 サークルにいろいろ通信を出したり、檄を飛ばすというのは大げさだけど、そういうふうに訴えをしたり、『人民文学』を君たちの力で支えてくれということは絶えずやっていました。

ただ、全般的な話をする、各地のサークルそれぞれの個性はあるんですけども、ただ、

やっぱり同好会をもう一度抜け切る、脱皮するというのが、なかなか難しいんですね。そして最初は共産党の細胞なんかサークル育成にかなり力を出したんですけど、時代の変化によって、サークルというものもなかなか伸び切れない。それから労働組合も、そういうものに対する関心は薄れていってしまっているのかなと。

—— 今、サークルに檄を飛ばされたというお話だったですけど、例えば浅田石二さんたちの下丸子文化集団とか、各地にいろんな詩人集団がありましたね。そういうところとの通信は、手紙が専らなんでしょうか。それとも各地であった集會に、例えば出かけていかれるということはありませんでしたか。

柴崎 いや、たまにありましたけど、なかなか忙しくて、そうはできないし。

浅田 こっちから出かけることはありましたよね。

柴崎 下丸子から来て、いろいろ会話してくれて。

浅田 私も何回か行って、それで柴崎さんを知ったんです。

柴崎 そんなことで下丸子なんかとは、非常に密接な形で、こちらから何も要求したりということはありません。むしろ作品も、今度はこういう方向でやっていくという情報を逆にもらって。

—— 各地に人民文学の友の会を作っていたと思うんですけど、それと編集していた側にやりとりというのはありましたでしょうか。

柴崎 それがねえ、まだまだ編集側の力不足でした。でも友の会の会員に、集まってもらって、そこで何か懇談会みたいなものを作ったりしました。それは多くやったことだけど、そして貴重な意見も受けとめました。

—— 雑誌の普及のための装置としてそこにまとめて送って売ってもらうというシステムは、あんまり確立していなかったですか？

柴崎 一生懸命誌代を回収してくれて頭の下がる思いのところもあったが、反面どうしても1/3ぐらいは焦げ付いちゃう。やっぱりね、地方のそういう人たちの生活が大変だったんだ。だから協力する気持はあってもなかなかね、代金を回収して送ってくれるっていうのは、たしかに、難しい行為ですよ。やっぱり我々の立場としてはね、いわゆる一般の出版社のように代金を納めろというようなことをね、強く言えないというのかな。だからぜひ我々も苦しいから協力して下さいという手紙を出したりね。申し訳ないということはわかっている、そのうち必ず納めるから、という葉書は何通も来てるんです。読者の返信カードというのものもあるんだけど、それが編集部で読者便りのコーナーに使ってしまったから、ぼくの手許に残らないんだけど。それから個人の愛読者、執筆した人、その他の協力者も力になってくれたことは見のがすことはできません。

—— 下丸子文化集団のように密接な関わりをもつサークルは少なかったということでしょうか。その一方で作品は続々と寄せられてくるし、自分も書いてみようという人たちは現れてきたわけですよ。その誌面を通じて全国のサークルの勢いを表現するというのが『人民文学』という雑誌の役割だったと思います。そうしたサークルの書き手たちとの交流というのは、どういうものだったのでしょうか。

柴崎 たしかに下丸子ぐらい力をもった、総合的なサークルは非常に稀だったと思う。なかなか会合の持てないサークルも多かった。

松川事件の詩人のグループとか、そういうものがあっても、そんなに強固なサークルは他にはなかったかなと思う。中には斎藤千君のように編集部には何度か顔をだしてくれた人もいた。とはいっても、当時はそんなに東京に出てこれられないし、『人民文学』に原稿を送ってくるという形のつきあいにならざるをえないところがあった。雑誌を送れといって送ると活動費に消えて滞納になってしまふ。みんな欠乏してた時代だったから。ゆとりがある人だったら自分の作品をどこかに売り込んで、今度は有名人になっちゃうからね、サークルからは離れていく。経済的にはサークル活動は難しい時代ではあった。雑誌を作る側としては、より多くのサークルと直接的に交流をはかりたいという意図はいつももっていながら、やはり経済的な問題やその他サークルの置かれている状況、そういうものがサークルとの結合を強化しづらい状況にあったということだと思う。サークルの書き手たちとの交流は、まだまだあの段階でもサークルの意図と編集側の意図が十分交わることができなかった。そういう歯がゆさをもっていたというのが当時の一面の状態だった。サークルとの交流という課題は本来中心的位置にあったにもかかわらず。

⑤編集・発行の実務、編集部の人々

—— 『人民文学』の原稿の依頼や原稿集めは先ほどの編集委員会の人たちがされたのでしょうか。

柴崎 原稿のやりとりなど実務的なことは編集部員が主としてやりました。私も時には遠出して、直接出かけて行って原稿の受け取りなどしました。例えば52年の2月号に載っている、小学生の作文集というのがあるんです

けどね（「町から村から 神奈川県住吉小学校二年一組生徒」）。それは東横線の、元住吉の小学校の先生が集めているという話を聞いて。ちょうど赤木健介の時代だったかな。そこへ足を運んで、原稿をもらったこともあります。

—— 発行資金はどうなっていましたか。

柴崎 創刊にあたって冬芽書房に大変お世話になったのは間違いないんですけど、冬芽書房からは紙屋を紹介してくれたり、印刷屋はここが安いからここにしろとかというような、いろいろなアドバイスはもらいました。同じ事務所の一角を借りているわけですからね、非常にそういう意味でのお世話をしてくれました。ですが、资金的には一度も現金的なもののやりとりはありません。あの当時、冬芽書房の紹介だということもあったので、3カ月ぐらいいは払いを待ってくれたんじゃないかと思いますね。だから創刊号が出たらもう必死になって当時の東販、日販というような取次店に行って、こういう雑誌が今後必要だからと説いて廻った。向こうは「しょうがない、じゃあこのくらいとりますか」と。どのくらいだったかなあ、東販で1500か2000か、部数としてそのくらいかな。日販がそれより2〜3割少ない、1000部から1300部くらい。それからもう一つ栗田書店というのがありましたけど、そこでも800部とか。大体刷り部数としては9000部から9500部くらい刷っていたと思う。『文学の友』は1万をちょっと超えたかな。実際にそれが全部売れば問題ないんだけど、返品が何割か当然ある。発行部数としては9000から1万1000部くらい、『別冊文学の友』は1万3000部くらい刷った。これは記録としてもあります。

いずれにしろ刷ったうちの全部を取次に卸すことはできない。あとは、近いところの、

たとえば下丸子に行って、サークルに販売協力をお願いして。あるところには、封筒に入れて送って、売ってくれないかと。読者を増やす運動はこうした形でもやったんです。なかなか回収ができなくてね。そういう手段だけではちょっと無理だということにもなったんですけれども。

—— 途中、何度もカンパの呼びかけみたいなことをされていましたね。

柴崎 やっていました。それから、人民文学債券の発行とかも。

浅田 この間ね、絵かきの岡本太郎さん、世田谷美術館で彼の展覧会があったんですよ。そこに、岡本太郎に来ていた野間宏さんのカンパ依頼の手紙が展示してありました。野間さんが直筆で、これこれこういうわけで『人民文学』についてぜひ寄附してほしいという、岡本太郎あてで出ていましたよ。直筆の手紙がありましたよ。

柴崎 そうですか。ありがたいことです。だからあるときは、思わぬ人からそういうカンパが届いたりしました。スタッフみんなよく頑張ってやってました。それで、創刊のころに戻りますと、その後、『人民文学』は、11月号、12月号、新年号、2月号と、4号ぐらいいまで何とか出し得たんだけど、そこからは月刊誌としては非常に情けない形で、間に合わなくて、いつも発行日がずれて、3号ぐらいいに江馬修が「やっと出てよかったな」と握手を求めたという編集後記を豊田正子を書いていましたけれど、そんなこともありました。これは『人民文学』の泣きどころで、最後まで金に欠乏して印刷屋を探したり、紙屋を何とか説得したりというような攻防を繰り返しながら発行した。それが『人民文学』の宿命でしたね。

当時、いつも資金がないという状況が続いていて、スポンサーがいるわけでもないし、オーナーがいるわけでもない。だから雑誌が出ると、まず東販とか日販とか栗田とかいうところに配本し、そして頭を下げて手形を切ってもら。で、東・日販、栗田とかいうような取次書店の手形だったら、どこへ行っても金利さえ払えば現金化できるわけ。仲間の出版社とか取次店もあったしね。^{だいあん}大安書房という、中国の物産を扱っているようなところもある。そういうところの友人に頼む。小林という社長がいたんだけど、またいつものように現金に、と多少の金利を払ってお礼をする。ときにはお前大変だろうから金利なしでやってやろうと。その手形そのものへの信頼で現金にしてくれる。それをみんな待ってるわけだ。持ってきたぞ、と。スタッフの頭数で分配する。それで生活ができるわけじゃないんだけど、当面ね、懷を潤すというようなことで。そういうものに対して労力を払うようでは、本当の時間はそのエネルギーを他に使わなくちゃならないと思いながらもね、やっぱりその金繰りというものが大変な労力だった。そういうことに対して編集部員から不満とか不服とか、それだけは一人もなかったの、これはありがたいことだと思いました。それが『人民文学』が継続できた一つの原因だったと思うんですね。

私の仕事として、取次に見本を持って巡り歩き、相手はそうだなあ、もっと取ってやりたいけど、返品の手当だって大変なんだよ。まあ今回はこのぐらいで我慢してくれ、みたいなね。もう一声なりませんか、あと百部ぐらいとってくださいませんか、というような交渉をいつもしていたわけです。

——『人民文学』というのは途中から印刷所

表記をやめて、人民文学印刷部みたいな形になるんですが、それはガサ入れ対策などの政治的な配慮の問題が主だったのか、金銭的な問題が大きかったのかどちらなのでしょう。

柴崎 金銭的な問題ですね。政治的な問題というのはもちろんありました。傾向が傾向だし、「印刷は引き受けるけど、うちの名前は出すな」というようなこともありました。けれども、主として金銭的な問題ですね。その後に、鎌倉印刷というのが登場しますね。鎌倉印刷は堂々と名前を出して、最後まで協力してくれました。

——人民文学社の場所はずっと一緒だったんでしょうか。

柴崎 最初は冬芽書房に間借りをしていました。51年前半ぐらいまではそうです。そのときの住所が千代田区富士見町。富士見町の共済ビルというところにあった冬芽書房で机を貸してもらって。そして、いずれは出なきゃならない、力がついたら出るということは、前提条件だった。そしてたまたま出入りしてた紙屋さん、洋紙店が、ちょうどここからわずかばかり下りたところの、飯田町に空き事務所があるよと、そこどうだろうと教えてくれ、早速行って交渉し、家賃はこれこれだということですから話が成立しましてね、早速移転したわけ。その後はずっとそこを拠点にしていました。飯田橋の水道橋寄りを降りて、広い通りを200メートルぐらい、靖国の方向に歩いた右側にありました。

——それから「大阪支社」というのが途中から加わりますが、これはどういうものだったのでしょうか。

柴崎 やっぱり普及のためのものですね。そしてあれはたしか『新女性』という雑誌がありまして、その雑誌と共同で大阪に支社の事

務所を借りたということです。いずれにしてもね、常時、駐在員はいないんですよ。時々私が出かけていってサークルを探したりして。あとは『新女性』が主体で、連絡は任せた。

—— 京都支社というのもそんな感じですか。

柴崎 そんな感じですが、京都の場合はそのこのサークルが提供してくれて、連絡も受け持ってもらったのだと思います。

—— 編集部というのは普段は何人ぐらいの体制になるんでしょうか。

柴崎 平均 5 人ぐらいかな。それに編集長と私です。思い出すままに編集部にいたことのある人間を書き出してみました。

○	小林勝
○	増永香
△	牛田幸雄
△	大木晴之 (中村)
○	阿部政明
○ △	東武雄
○	前田喜美子
△	白井恵子

石井藤子

○印が主として編集に関わった者、△印が営業経理関係だった者です。欄外の石井藤子というのはときどき来て手伝ってくれていた。関係者の写真をいくつかもってきたのですが、これが人民文学社前で撮った写真で (写真5)、左が私、右上が阿部政明、その下が東武雄、下の女性 2 人の右が前田喜美子、「ピンちゃん」と呼ばれていました。左が白井恵子です。もう 1 枚は人民文学が解散する前後の写真 (写真6) で、上の左から大木、私、現在の会の吉岡、牛田、下の左から小林、白井、増永、戸石です。もうお別れということでみんなが集まって撮ったものです。

—— 当時増永 (下田)さんは編集部に入られて、具体的にどういう仕事をされたかは記憶されていますか？

下田 だいたいね、原稿を取ることに、絵をお願いに行くのは良く行きましたね。女の子だ

から弱いんじゃないですか、作家さんも。にこっと笑ってうまくもらってくる。原稿はタダでお願いしているわけですから。だからけっこう原稿取りは行きましたね。画家の内田巖さんのところにも行って、立派な家でね。中谷泰さんもその後芸大の学長になられたけど、その頃まだ、やっぱり共産党で貧乏してましたけど。絵を頂いたりしたなあ。なんかあの、みんなと全然雰囲気違うから、『人民文学』とかそういう問題意識に共鳴して下さ



写真5 人民文学社の前にて



写真6 文学の友社解散前後

る方は、おおよく来たね、みたいな感じでしたよね。何だまた来たかというような感じの人はいなかったなあ。大体ほらみんな食うや食わずでやってるから、ちょっとおにぎりご馳走してくれたり。やっぱりそれはありがたかったですよ。だから私も若い人見たら、お腹空いてたらご馳走しなきゃなと。さんざんご馳走になってありがたい思いしたからね。そういう家庭的な雰囲気だったかしらね。それであんまり甘えすぎてもいけないんだけどね。本当はちゃんと原稿料って払わなきゃいけないんだけどね(笑)。

柴崎 それが一番辛いとこだよな(笑)。わずかでも包んでこれ原稿料ですと持って行けばどんなに良かったか。まあ、たまにはわずかだけど持ってったこともあると思うよ。だけど全て今みたいに振り込みだとか何とかいうようなことは、くやしいけどできなかった。関係者一同で一度だけ慰安旅行に行ったことがあるんです。草津のね、シベリアから軍隊で引き揚げてきたのではないかと想像するんだけど、草津のある山の中の温泉のオーナーで『人民文学』のファンの人がいて、ぜひ皆

さんいらっしゃい、招待するからといってきたんです。何か悪いような、あの頃は我々まだ温泉なんて、のこのこひたれるような日常じゃなかったんだけど、みんな若いから、おお行こう行こうと。たまには温泉ぐらい入らないと元気出ないよ、みたいなことで、大挙して押しかけたんです。『人民文学』にめずらしく表紙の三面に、その温泉旅館の広告が載ったと思う。先方にとっては割りの合わない、広告料と引きかえにという好意的なもてなしだった。

4——『人民文学』から『文学の友』へ

①会社設立構想と日本文学学校

柴崎 こういうものが残ってるんですよ。

——「株式会社設立趣意書」ですか(写真7)。和文タイプで打ってありますが、ちゃんとした登記用のものでしょうか。

柴崎 登記用の書類です。末尾を見てください。

—— ああ、野間宏、安部公房、徳永直、松山映、瓜生忠夫、藤原審爾、木下順二、竹村一、菅原克己。これはすごいですね。このメンバ

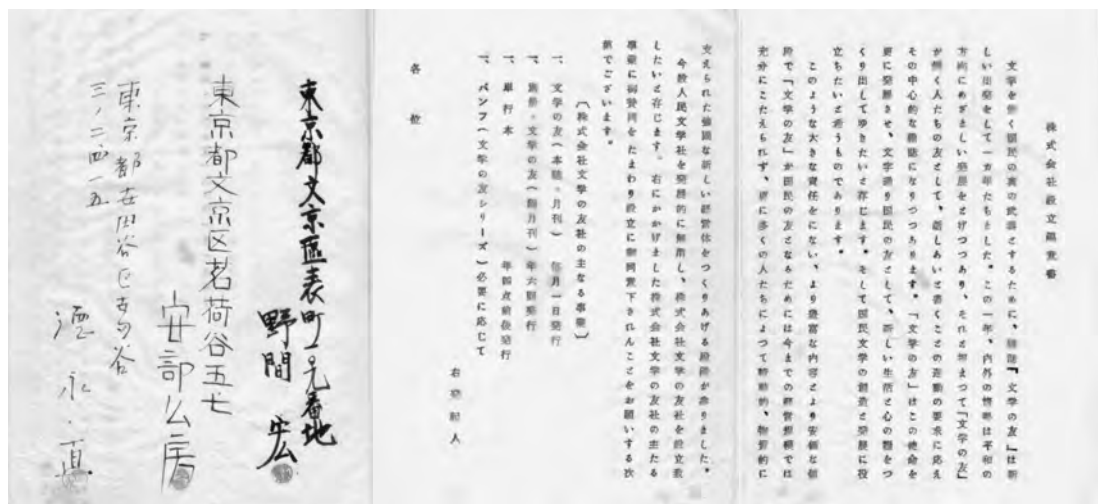


写真7 株式会社設立趣意書の本文

一はどういうふうにして揃ったんでしょうか。柴崎 とにかく一人一人説得して回ったと思うんですよ。一つの背景は新日本文学会との、特に野間宏を中心にした、今までの文学者連中との和解が始まった。新日本文学会との対立をできるだけ緩和すると、『新日本文学』と『人民文学』の統一というような話し合いも一部でなされていた。しかし、経営体としての『文学の友』は、まあそういう状況はあるけれども、どちらかといえばサークル、そういう組織に力を置いて、つまりもっと文学の普及という点において、まだ未知の世界に文学の普及をしようという、そういう動きになってきているのです。

だから、言ってみれば新日本文学会の動きそのものに対して、『文学の友』の経営というものはそれほど問題にしていなかったという部分もあるわけで、新日文は方向性としてはいわゆるプロ的文学者だけを相手にしている傾向があり、私たちとしてはもっと大きな大衆に向かって普及活動をするべきだと、ちょっと言い方はまずいかもしれないけども、新日本文学会は一つの層にすぎないというような考え方があった。

そこで当面一番問題なのは経営ですから、財政的には安定方向を目指さなければならない。だから、『文学の友』をきちっと確立するためには、株式会社を設立して『文学の友』をその株式会社の中心に据えるという経営方針を、当事者として立案したわけです。そして、それを個々に説いて回ったと、一人一人にね。それは皆さん、実印で署名してくれたのですから、真剣に賛同してくれたと思うんです。当時の書物を読むと、例えば徳永直は新日本文学会に反旗を翻したとか何とかいろいろないろいろの論評はあるにしても、それは文学



写真8 人民文学社の前で（左から柴崎氏、安部公房、野間宏）

者間のこと、一つの動きであって、『文学の友』というものはもっと大きなですね、働く者の文学を新しく打ち立てるんだというような、あの当時とすれば当然のことだけど、今考えれば若い未熟な部分を持ちつつ……。

まず、それに対して野間宏が賛同し、野間宏、安部公房——そういう人たちの力をかりて、一生懸命説いて回ったということです。

もう『文学の友』の時代は文学者がというよりも、それはさっき言ったようにむしろサークル、下丸子との関連とか全国のサークルとの関連のほうに方向性は十分向いていたわけですからね、文学会がどういう動きになろうとも、本来ならばサークルの関連の中で生きていくという方向が一番望ましかったんですけど、だんだん社会情勢そのものも変動してきてますからね、『文学の友』の存在感そのものがやっぱり十分行き渡らない状況の中で、これから株式会社として進める作業は完成しないで挫折したということになった。

で、幾らか株は集まってきたけど、それに対して賛同してくれた全国の人に対して非常に申しわけないというわび状は出していると思います。そのときに諸般の情勢そのものを詳しく書いて、私信的な形で出してるんじゃないかなと思います。

—— 会社の手続、登記をすとか、そういうところまではいったんですか、それともその真ん中で……。

柴崎 その直前まで。だけど実際は登記されなかった。

—— ちょうど同じころ日本文学学校¹⁴⁾ が作られると思うんですが、文学学校をつくる上で、一番主導的に動いていた方はどなたですか。柴崎 『人民文学』の編集部だと思います。サークルの人たちも一部いたかな。文学学校をつくろう、文学学校が必要だということは各地のサークルの人たちの考えでもあったし、要求でもありました。人民文学側としてもそういう学校で新しい作家を育てるということは、当然の使命としてやりたいという希望は常にありましたが、なかなかそのタイミングがなかった。

たまたま山岸外史という人物が登場して、この人は時々、人民文学社にあらわれていた。戸石泰一とも友人で、自称太宰治の弟子だという人物でね。仕事が終わって夜、飲み屋で飲むと、なかなか彼の考え方というものが評価に値する人物で、心を動かされた。当時評論は書いたりしておられた。「そうだ、先生、学校をやってくれませんか」と。そんないきさつを経て、今までずっといっていた文学

学校をやろうということになりました。これは全く人民文学側の発想です。ぜひともやってくれませんか。で、必要な準備のひとつとして、当時、代々木に日ソ協会というのがあって、教室になる場所の確保をそこに頼んで借りたんです。

それで、山岸外史は事務局長になり、事務局は真鍋呉夫のいとこの笠君という人が担当しました。山岸という人に対しては、最初サークルの人たちは距離感を持ったかもしれないけどすぐに融合して、彼はあんまり自意識を出さないで、サークルの人たちの協力をもらって運営していきました。講師の人たちも自分の考えを若者に述べるということの意義、楽しさを実感したのではないだろうか。

初代の校長は阿部知二。これは恐らく山岸外史のコネで生まれたと思います。このようにして、『人民文学』がつくった学校ですが、できあがってみると期待するほどの交流が生まれませんでした。第1回の入学式に出席してあいさつをさせられた記憶はありますが、物事は発案側だからといっても思うようには進まないものです。

—— その文学学校から出てきた成果は、『文学の友』に反映されていくような形になったのでしょうか。

柴崎 そのつもりだったんだけど、なかなかそうはいかなくて。人民文学側としてもそういう学校で新しい作家を育てるということは、当然の使命としてやりたいという希望はありましたよね。何か、文学学校だけが別個に走り出しているような感じになりました。

これは文学学校の人たちが写っている写真で(写真9)、左上が笠君、その下が編集部の牛田、真中が山岸外史、上が中国人の青年で



写真9 文学学校の人たち

このころよく顔を出していました。その下が編集部の白井です。

—— 授業料が随分安かったようですが、運営はどうされたんですか。ボランティア的な形だったんですか。

柴崎 僕らも金がなかったからね、文学学校に金を出すというところまではとても及ばなかったから、恐らく独自に何かやっぱりそういう財政問題を考えたんだろうと思うんです。人民文学社はそこまでは協力できなかったのは残念なことだと思います。

—— ほんとに初めて書いた人の感想とその人の文章みたいなものが、第1期、第2期の卒業生のものが結構載ってますよね。そういう中で、黒井千次さんもここに在籍をしましたか。たしか文学学校絡みで黒井千次さんの記事があった気がするんですけど。

柴崎 それはないと思う。彼はその頃まだ東大生で、学内に独自のサークルを持っていたのではないだろうか。人民文学に時々顔を出し、まとめて購入してくれていた。当時イラストレーターとして協力してくれていた大野碌氏によると、「下町探訪記」という本誌編集部の企画を黒井千次氏と共に取材し、スケッチを担当したと証言しています¹⁵⁾。

—— 文学学校は文学の友社が解散するまでは、人民文学社、文学の友社と連携し、後に新日文に移りますよね。それは人民文学社が解散してからでしょうか。

柴崎 だと思う。つまり母体がなくなっちゃったわけだから。

②『文学の友』の編集

—— この『文学の友』に変わるときの経過は先ほだちょっとお話をうかがいましたが、新しい雑誌のタイトルとか編集体制というの

は、今度はどなたがお決めたったんでしょうか。編集委員会で？

柴崎 雑誌の誌名、これは当時の編集部が中心となって、私がちょっと課題として投げ込んだものに対してかなり時間をかけてね、『文学の友』という名前が誕生したんだと思うので、これはだれか個人がそれを持ってきたというよりも、当時の編集部として参加していた人たちによって誕生したということが正しい言い方ではないかと。当時編集委員会はまだ有名無実になっていましたので、編集部ですね。戸石さんたちの意向が強かったかな。戸石泰一が中心になるから、みんな協力しようという形になって、それから野間宏とか安部公房とか、そういう主だった人の意見を聞いた。『文学の友』で行きたいがということに、いいんではないかとなり、執筆の面でも現在の会の人たちに大いに協力してもらうことになりました。安部公房にも創刊号から大いに力を貸してもらいました。

—— 巻号を連続させているということは、『人民文学』から断絶するということではなくて。

柴崎 ないです。だからはっきり『人民文学』改題としました。

—— もう少し読者層の幅を広げて、受け入れやすいものにしていこうということですね。ちょうど現在の会が初めてルポをやったときというのは、伊達得夫の出版社で『私たちの報告』というのを出して、内灘に眞鍋呉夫が行くんですけど、結局すぐルポが遅れて大赤字になったという話なんです。一方で『人民文学』のほうには伊達得夫自身の内灘ルポなんていうのが掲載されたりして、その辺の関係がちょっとおもしろいんですけど。現在の会というのは結構『ユリイカ』と伊達

得夫との関係があったと思うんですが、そういうところと何かこちらのほうでつながることというのは。

柴崎 そうですね、たしか眞鍋呉夫がルポルタージュを書いていますよね。彼はやっぱり『文学の友』を優先しちゃったのでしょうか。これは、一つの市場性を持っていますからね。そういうふうには私は想像します。だからそれで先に載せたのかもしれないですね。

—— 眞鍋呉夫の関係だろうと思うんですけど、『文学の友』に上野英信さんの原稿もたしか載っていましたね。筑豊で出していた「えばなし」を掲載して。

柴崎 そういうこともありましたね。

—— 『文学の友』では、その後素人が生活綴り方を書いていくというような方向に移っていったように見えます。文学学校も同じような動きがあったと思うのですが、それに関して54年10月の読者便りというのがあって、最近の『文学の友』というのは『人生手帖』とか『葦』みたいになっちゃってつまらないという批判も出ていました。最初の人文（人民文学）時代は詩とか評論がかなり大きなウエートを占めていたのが、生活記録のほうに行ったという理由とか、そこでどんなことが問題になったかとか、そういうことについてはご記憶はありますか。

柴崎 やっぱこれは不思議なもので、当事者はなかなか結果論というか、あるいは客観的に見る目というのは非常に弱いんだよね。だから、なぜかということの反省をする余地はあまりなかった。生活記録のようなものが増えていったのも、もっと何かあるんじゃないかという前向きな取り組みの一環だったと思うんですよ。そこで一度、徹底した総括や反省を強くすべきであったと思う。

確かに『人民文学』という文学に対する一つの権威というものの、この必要性は十分あったと思うんです。だけど雑誌を拡大する、普及するという使命感というか、一種の状況に対しては何かやっぱり新しい方向を模索していかなきゃならない。それが『文学の友』に影響していったんだという、結果論としてはね、なかなか……。

—— 50年前後にかかなり素人が書き始めたときは詩を書かせることが結構多かったのが、『山びこ学校』（無着正恭編、青銅社、1951年）のヒット前後から綴り方、散文のほうに全体の動きが変わった印象もあります。『人生手帖』とか『葦』のような、いわゆる生活記録雑誌みたいなものと『文学の友』を分けるラインというか、アイデンティティというようなものはどんなところに設定されていたか。

柴崎 『山びこ学校』については一つの存在価値としては認めながらも、特別な意識というのはなかったですね。もともと生活記録の方向性というのは自分たちで意識していたと思うんです。

それから生活記録雑誌についていうと、まあこれは一般論としてだけど、『人生手帖』や『葦』は一種の同人雑誌だと、私たちは見えていて、で『人民文学』というのはもっと使命感の大きい、全国的な雑誌として存在価値があるんだ、というような感じですね。だから別にレベルをつけるわけじゃないんだけど、あまり意識はしてなかった。同人誌的にやってるのと一般書店で販売するというのはやっぱり違うんだと。

—— 『文学の友』時代には3冊の「別冊」が発行されていますね。

柴崎 あれなんかは、集まった作品を収録するのにこれでは薄過ぎるということで別冊を

つくったわけです。これは営業政策も当然絡んでいます。別冊の第一号はとても売れました。もう衝撃的だった。当時の取次店は、大体昔からの取り決めとして、初版というか創刊号というか、それにはね、多めに取り扱いをしてくれます。そういう面もあったと思うけど、いずれにしても評判は良かった。これで何とか今後財政を潤おしてゆかなきゃいけない。そんな情況と考えたんだが、なかなか…… (笑)。

そのころ文学学校にはずいぶん生徒が集まっていたわけで、それぞれ機運というものがあつたんだね。けれど雑誌がそれになかなかうまくかみあうことができなかった。懐から金を出すということが大変難しい時代ではあつたわけだ。たかが60円だけれども、あの頃の60円というのは大変なものだった。

—— さっきの株式会社の設立趣意書の中に藤原審爾さんの名前があつたんですが、この人は『文学の友』に途中から加わってこられたんですか。

柴崎 そうです。戸石泰一と密接な関係があつて、実務的に『人民文学』にいろいろしたというよりも、文学の世界というのはこうだというような一つの社会的な認識の仕方を、私は時間外に酒を飲みながらいろいろ講義を受けたような記憶はあります。実務的な問題についての関係は全くない。当時の『人民文学』や『文学の友』にとっては藤原審爾というのは少し外の世界で、つまりこういう文学運動というものではない、いろんな新鮮な話が聞けた。

—— さっきの会社に関わった中では瓜生忠夫という名前も、やはり途中から加わっているわけですか。

柴崎 そうそう。この人はね、新日本文学で

の動きがあつた人でしょうね。特に後期になって私どもも交流しました。もともとは野間宏と非常に密接な関係を持っていた人で、いろいろ協議したりしたようです。

—— 『生きる』(理論社、1955年)というのが生活綴り方の典型としてかなり話題になりましたけれども、この著者の山田うた子、あるいは鎌田うた子とはどういう形でつながりができたのでしょうか。

柴崎 誰かの紹介で原稿が持ち込まれたんだと思います。それがサークルの人であつたか、誰だかはわかりません。

—— 人民文学社では、独自に掲載した作品から単行本をつくるという企画はなかつたんですか。

柴崎 そうだな、そこまでは力が及ばなかつた。あれは1冊ぽこっと出して、そのままというわけにはいかない。やっぱり定期的に出さなければ書籍出版というものは成り立たない。もう雑誌を出すだけで精いっぱいだったと思う。今だったらスポンサーに誰かがついてね、あるいは企業を説得してスポンサーにというようなこともできたんだろうけど、あの頃はなかなかむづかしい時代だった。

—— 『人民文学』の時代は全国のサークルからいっぱい雑誌とか詩が送られてきて、誌面も非常ににぎやかな印象を受けるんですけども、『文学の友』の時代に入ってその路線でやっていこうとしたときに、作品が集まらないこととか作品の質が不十分であるということが時々、編集後記に書かれていたりすることがありまして、その一方で別冊を出すときは、とてもいい作品が集まったという編集後記もあつたりするんです。そのサークルの勢いというんでしょうか、雑誌がパートナーとして考えている全国のサークルの勢いという

のは『文学の友』が出ている間にどんな状況になったんでしょうか。編集後記を読んでみると何となく、少し沈んでいくような印象を受けるんですが。

柴崎 そうなんだ。それは断言はできないけれども、サークルそのものは全国に広がっているけれども、思ったよりも大きくならなかった。その象徴的な形として、下丸子なんか一番活発であるんだけど、やっぱりサークルそのものの一つの組織を拡大するということの限界というのがあったのかなと思う面がある。下丸子を見ていると、それぞれの人たちがいろんな活動の中から成長していついていけるけれども、大きく広がるということがね、難しい問題ではなかったかなと思うんです。だから、やっぱりそれは当方としても経営方針の非常に難しい問題にぶつかってきていたわけで、当然のこととして、これは時代の変化が影響していると思います。

理想を言えばきりがないけど、願いとしては全国のサークルから「文学の友、頑張れ」というような形で雑誌の普及にも携わってくれるスタッフでいることが考えられたんだけど、実際にはなかなか現実はそのままでいかなかった。

③人民文学社の終わり

—— 先ほど『文学の友』から新日文への合流の話というのは野間宏などの文学者が中心に進められたとおっしゃいましたが、そ

ういう動きに対して、柴崎さんの側ではどうお考えだったのでしょうか。

柴崎 それは私も、時代の移り変わりかなと。そして出版物の、つまり運営の難しさ。自分の経営力の未熟さというものを反省しました。—— 『文学の友』の廃刊についてはどういうことだったのでしょうか。

柴崎 これは最終的には財政が続かなくなったということです。

—— 『生活と文学』¹⁶⁾ という雑誌がその後百合出版から出ますが、これへの引き継ぎのようなことはあったんでしょうか。

柴崎 全くありません。『生活と文学』というのは、これはもう『文学の友』とは全然関係なく、私も詳しくは知りません。全く『文学の友』とは流れの違う形のものだと思います。

『文学の友』を収束するに当たって、大分負債がありました。私はこれから生きていく上で逃げるなんてことをしたくなかった。ま、3年かかって、返済しました。最終的にはかなり同情してくれて。紙屋と印刷屋が主要なる債権者だった。ある時点でもういいよ、よくやってくれたねと。雑誌にかぎらないが、それなりの資金を用意しておかなければ、苦しいときに、せつかくもうひと踏ん張りだという時にお手上げしてしまうようではどうしようもない。これらの反省の上に立って、次の新しい課題に向かって歩みを始めました。

—— ありがとうございます。

《注》

- 1) 本多秋五『物語戦後文学史』中巻、岩波現代文庫、2005年、206頁。
- 2) 井之川巨「なぜ「人民文学」なのか」『なんぶ』第7号、1976年7月、3頁。
- 3) 鳥羽耕史「サークル詩・記録・アヴァンギャル

ド——1950年代文学の振幅」岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編『戦後日本スタディーズ1 「40・50」年代』紀伊國屋書店、2009年、鳥羽耕史編「『人民文学』総目次」『言語文化研究』第12巻、2005年2月、成田

- 龍一「『断層』の時代——1950年代前半の歴史像への試み」『思想』第980号、2005年12月、道場親信「下丸子文化集団とその時代——1950年代東京南部サークル運動研究序説」『現代思想』第35巻17号、2007年12月など。
- 4) 冬芽書房。1948年～1950年に活動した出版社。中垣虎児郎、徳永直、江馬修らの著作を出版した。
 - 5) 江崎誠致（えざき・まさのり）。1922年生れの小説家。1957年、「ルソンの谷間」により第37回直木賞受賞。
 - 6) 小山書店。伊藤整訳『チャタレイ夫人の恋人』の出版とその裁判で有名な出版社。小山久二郎『ひとつの時代——小山書店私史』六興出版、1982年、参照。
 - 7) ハト書房。1951～1954年に活動した出版社。サークル詩集『平和のうたごえ』全2集や、中国文学の翻訳を主として出版。
 - 8) 『BBBB』。冬芽書房発行の美術雑誌。1949年11月～1950年5月、全6号。
 - 9) 江馬なかし「文学の大衆路線へ」1951年2月号、穴戸弥生「宮本百合子の死」1951年3月号、齋藤千「われわれは宮本百合子をダンガイする」1951年4月号など。
 - 10) 現在の会。ルポルタージュを志向して1952年に安部公房、真鍋呉夫らが結成した会合。『内灘』（朝日書房、1953年）、およびルポルタージュ・シリーズ『日本の証言』9冊（柏林書房、1955年）を刊行。
 - 11) 『文学の友』。『人民文学』の改題後継誌として、巻号を同じくして人民文学社より1954年1月創刊。1955年1月号より文学の友社発行。1955年2月までに、全14号および別冊3集を刊行した。
 - 12) 『詩運動』。人民文学詩委員会、のち詩運動社発行のサークル詩運動雑誌。1953年2月～1955年12月、全14号。
 - 13) 許南麒「詩 火縄銃のうた—朝鮮の多くの悲しい妻と母と、娘達におくる—」『人民文学』1951年7月号、金達寿「一つの開花によせて—足柄定之著「鉄路のひびき」—」『文学の友』1954年3月号、呉林俊「まだ用意されているものがある」『文学の友』1954年3月号、朴元俊「民族本来の姿を「抵抗」としてとらえている」『別冊・文学の友』第1集、1954年4月など。
 - 14) 日本文学学校。1953年11月開校、翌年6月に第1期卒業、第2期入学。『文学の友』と連動しながら労働者自身による文学創造を目指した。現在は文藝学校と改称。
 - 15) 大野氏から寄せられた証言は以下のとおりである。「私が「人民文学」とかかわるようになったのは、生命保険会社で仲間と文芸サークルを立ち上げた時代に「人民文学」に在籍していた東武雄君からカットを描いてくれないかと頼まれたのがキッカケだった。／廣末保さんが中心になっていた集まりにも何回か参加したのを覚えている。それが「人民文学」の編集会議だったのかどうか記憶は確かではないが、「下町探訪」という企画が生れ、当時東大サークルで活躍していた黒井千次さんと二人で浅草を歩き廻り、買春禁止法後の吉原も訪ねたのを覚えている。黒井さんが取材文を、私がスケッチを担当した。このシリーズが何回だったのか、覚えていない。」
 - 16) 『生活と文学』。『文学の友』の休刊と新日本文学会の再編を受けて、新日本文学会編集、百合出版発行で刊行された生活記録雑誌。1955年11月～1957年3月、全17号。
- 追記** 本インタビューおよび解題は、2009年度科学研究費補助金（道場親信「1950年代地域サークル文化運動の歴史社会学的研究」、鳥羽耕史「戦後期日本のサークル運動と文学についての基礎的研究」[ともに基盤研究(C)]）による研究成果である。

——— [みちば ちかのぶ・和光大学現代人間学部現代社会学科准教授]

[とば こうじ・徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授]